

共同研究 ● 映像民族誌のナラティブの革新 (2013-2015)

人類学は、参与観察に基づく異文化の全体像の把握、そしてその社会で暮らす人々の生活の詳細な描写を民族誌というかたちで行ってきた。同時に、映像による民族誌である民族誌映画を中心に、映像を用いた文化の記録と研究も蓄積してきた。テキストによる民族誌が記述方法の実験と変革を重ねてきたのと同様に、民族誌映画でも様々な制作方法や映画様式が模索されてきた(川瀬 2014b)。近年、欧州人類学映画祭機構(CAFFE)に加盟する学術映画祭を中心に、民族誌映画



SoundImageCultureのセミナー風景(2011年、ベルギー)。

の国際的なプラットフォームが形成され、人類学全般における新たな理論潮流が生み出され、活発な議論が展開している。映像表現の新たな次元が切り拓かれ、多様な映像ナラティブが開拓されているのである。

映像による民族誌の認識論的転換

民族誌映画の多くは概して、学術論文の論理的な記述様式を踏襲しつつ構築されてきたといえる。民族誌映画の歴史をふりかえると、制作者の存在があえて作中で明らかにされない観察フィルム(タートン 2010)や、プロのナレーターや研究者による解説を主軸とし、そこに補足的に映像が組み込まれる作品は少なくない。作中で映像は、テキストによる解説を必要とする素材、ないしは議論の挿絵のような副次的な役割に位置づけられるのである(川瀬 2014a)。しかしながら、フィールドワーカーの経験は、視覚にはじまり、聴覚、触覚、味覚、記憶、欲望等の合理的には論述することが難しい非言語的な感覚(MacDougall 2008)の相互作用のなかで、民族誌や民族誌映画として結実される。参与観察をベースに発展し

てきた人類学は、暗黙のうちに、視覚を感覚の最上位に定め、その他の感覚については軽視してきた(Van Lancker 2012)。そのような態度への反省を踏まえ、各国の主要な映像人類学の研究機関では、センサリーメディア、すなわち人の感覚をキーワードにした、オルタナティブな文化の記録と表象の方法、を探求している。センサリーメディアの実践には、特定のスペースにおける音、テキスト、写真、モノのインスタレーションや人の心象を軸にしたマッピング、身体パフォーマンス、あるいはこれらのうちのいくつかを組み合わせる方法が挙げられる(川瀬 2014b)。そして民族誌映画の制作でも、以上のようないわばコンテンポラリーアートの世界におけるオーディオ・ビジュアルの表現方法を、人類学的な表現として積極的に援用しながら様々な実験や探求が行われている。1つの作品の中でフィルムやビデオ、写真等、異なるメディアを組み合わせたり、アニメーションを取り入れたり、映画的話法の様式が飛躍的に多様化している。

現在、民族誌映画にはもう1つの顕著な傾向がある。「民族」を客体化し、集合体としてとらえ俯瞰的に表象する観察型の映画様式が主流であった時代は過去となり、制作者自身の主観を前景化した作品が増える傾向にある。例えば、この類の映画においては、撮影者/調査者が、形式的なインタビューではなく、被写体の人々と日常会話を交わし、意見を交換し、同時代人として被写体とともに生きる現実が描かれ

る。私が客員講師を務めたベルギーを拠点とする芸術・映像人類学のワークショップSoundImageCultureは、人類学的な映像実践における研究者の主観の前景化を、目標として掲げ、優れた映像作品を学術映画祭に送り出している。しかしながら、制作者自身の立場や心情の映画的な表現に過剰にこだわることは、自己の安易な表象化に帰結し、他者との出会いを拒んだモノローグに陥りかねない(川瀬 2013)。映像の民族誌の醍醐味は、文化の記録と映像表現という安易に相いれることのない力の均衡をスリリングに探っていくなかにある。

いずれにせよ、テキスト主体の民族誌記述を踏襲する映画構築や視覚を偏重した民族誌映画制作のありかたはいったん解体され、研究者の感覚を軸にした新たな映像実践を中心に映像人類学は生まれ変わろうとしている。これらの研究潮流を踏まえて民族誌映画の最前線の動きに比肩する活動を日本から発信していく必要があると考える。

共同研究のめざすもの

日本文化人類学会では、2006年の第40回研究大会(於：

東京大学) から映像作品の上映と討論を中心にしたセッションをはじめており、すでに70を超える作品が発表された。民族誌映画祭での入選や受賞を受ける作品も生まれている。若手の人類学者が、対象となる社会や人びとをどう記述するかという試行錯誤の末、映像のナラティブを選択し、それぞれの創意工夫のもと方法論を発展させてきたといえる。このような動向と軌を一にして、



ゲッティンゲン国際民族誌映画祭の上映会場 (2012年、ドイツ)。

2006年のハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所の映像人類学シンポジウム、2008年のポーランドのトルン民族誌博物館、2013年のマンチェスター大学で開催された国際人類学民族科学連合 (IUAES) 会議、さらに2014年の幕張において開催された同連合中間会議において、日本の人類学者による民族誌映画の特集上映が組まれた。これらの企画で上映された作品の多くは、上記の映像民族誌の最新のディスコースと呼応する問題提起を孕み、これらの国際的な場を通して広く議論されている。

筆者は、そのようななか、2013年10月に共同研究『映像民族誌のナラティブの革新』をスタートさせた。研究の目的は、人類学、シネマ、コンテンポラリーアートの実践が交差する場から、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓することである。本研究では、映像人類学の各学派の研究潮流の分析、人類学に援用可能なアートやシネマの方法論の考察を行う。そして、メンバーによって制作された民族誌映画やインスタレーション等について報告しあい、その議論から映像による民族誌の新たなナラティブを創造し、その可能性を人類学および隣接する学問に提言する。

筆者が研究員として所属したマンチェスター大学グラナダ映像人類学センター、客員講師を務めたベルリン自由大学メディア・映像人類学修士課程とベルギーの芸術・映像人類学ワークショップ SoundImageCulture、その他トロムソ大学映像文化研究学科、雲南大学人類学科、そしてハーバード大学 Sensory Ethnography Lab の学位フィルムやインスタレーションに着目する。以上の機関の教員や学生、卒業生と、国立民族学博物館の有する施設・通信技術を用いて、作品の背景や制作理論について討論する。そうして各学派の映像ナラティブの分析をすすめていく予定である。

本共同研究メンバーの大半は、映像人類学に関連する学術映画祭や会議に積極的に参加し、そこで自らの作品を発表するとともに関心を共有する各国の研究者たちとネットワークを築くなど、すでに精力的な活動を展開している。彼らの研究対象地域は、エチオピア、カメルーン、ウガンダ、ネパール、チベット、キューバ、ベトナム、インドネシア、中国等、各国に跨り、各自の研究課題や制作の方法論も多様である。共同研究では、各自の目的や問題意識に基づくモニタージュ方法論、人類学のディスコースへのオーディオ・ヴィジュアル

ルなアプローチ、さらには、アートやシネマにおける人類学に援用可能な方法論の考察に関して理論的・実践的な議論を行う。

適宜、メディアアーティストや映画監督を特別講師として招聘し、研究発表した作品に対するアイデアや批判を受け付ける。ブラッシュアップした研究作品を、欧州人類学映画祭機構に属する学術映画祭をはじめとする審査付の学術映画祭

のコンペティションに出品する。また、上記のセンサリーメディアの議論や、制作者の主観の前景化の問題、さらには演出、ドラマの技法を取り入れた民族誌映画制作、エスノフィクションの議論の脈絡に一石を投じるような作品の制作をすすめていきたい。

また、民族誌映画は概して、映像を享受する側の存在、役割を軽視する傾向にあったが、メディア環境の変化とともに、制作者は幅広い表象の受け手と向き合い、相互交渉を重ね、作品に関するリアクションを再帰的に研究に反映させる必要性が高まっている。本研究では各自の作品が学界内外で引き起こす議論についても着目し、民族誌映画に対する多面的な受容・解釈のありかたを研究に反映する方法について検討したい。

本共同研究を通して、我が国から、映像民族誌の国際的な論壇へ向けた研究発信がさらに増えていくことが期待できるであろう。

【参考文献】

- 川瀬 慈 2013 「文化の記録と映像表現—ブリュッセルの映像制作実習コース見聞記」『フィールドプラス』9: 24-25。
- 2014a 「音、身体、イメージの新たな関係—Sensoryscape from Gondarのこころみ」『年報カルチュラル・スタディーズ』2: 198-203。
- 2014b 「民族誌映画」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp. 490-491 丸善出版。
- MacDougall, David 2008. The Camera and the Mind, *The Catalogue for Sardinia International Ethnographic Film Festival*. Instituto Superiore Etnografico della Sardegna: 14-20.
- タートン、デイヴィッド 2010 「映像による異文化表象の諸問題」田沼幸子訳『コンフリクトの人文学』2: 221-241。
- Van lancker, Laurent 2012. *Experiencing Cultures: A Study in Sensory, Narrative and Collaborative Practices in Documentary Cinema*. Universiteit Ghent.

かわせ いつし

国立民族学博物館文化資源研究センター助教。エチオピアの音楽・芸能をはじめアフリカの無形文化に関する民族誌映画制作に取り組み。IUAES 国際映像人類学理事會理事 (2008-)、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所ヒオプ・ルドルフ客員教授 (2013年)、第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭作品選抜委員 (2014年)。